和歌山大学観光学部

藤田武弘学部長に聞く

「資源」見直すきっかけに

農村部は、急増するインバウンドの需要にどう向き合うことが大事なのか。都市部と農山漁村の交流を通じた地域づくりの研究に取り組む、和歌山大学観光学部の藤田武弘学部長に聞いた。

◇

「インバウンド需要を農村部へ」と考えるとき、この需要を短期的な経済効果としてだけ捉えることは正しくない。確かに農山村を訪れる外国人は訪日旅行のリピーター(再来訪者)を中心に増えていることから、地域の経済に結び付けようと考えることも理解できる。

しかし、経済効果に振り回され、とにかく人を呼び込もうとした結果、地域の人の生活や農山村の資源が失われる事態にもなりかねない。それでは持続的な観光にはなり得ない。

農山村を訪れる外国人の意識は「爆買い」に象徴される「モノ」の消費とは別のところにある。農家民宿などに滞在して日本の生活そのものに触れたり、日本の文化を体験したりしたいという目的で訪れる場合が多い。そういった人と人との交流によって、鏡に映したように地域住民が農山村の本来の価値に気付くきっかけにもなる。

交流で生まれる価値見いだそう

グリーン・ツーリズムにおいて期待される交流による「鏡効果」は、外国人との関係においても発揮される。文化や風習が違う外国人である場合、よりグローバルな視点で日本の価値や農山村の価値を振り返る機会になる。

都市部の住民やインバウンドの取り込みに成功している事例に共通していることがある。それは、第三者による客観的なまなざしを利用して、地域の分析ができているという点だ。分析するのは、数字で表せる人口や経済力などではない。地域のコミュニティーが持つ本来の力を分析する必要がある。そのためには、大学などとの連携も一つの手段だ。

インバウンド対応を通じて、地域をどうしていきたいのかという長期的な展望を持つことが何より重要だ。一過性の取り組みではなく、人材育成や定住、移住など将来的に農山村に根付く取り組みにしていってほしい。